



HISTORY

FROM NEW YARDBIRDS TO "NO QUARTER"

ジミー・ペイジとロバート・プラント。ついに来日をはたした彼ら二人は、いうまでもなく、1970年代のロック・シーンを象徴する存在としてその頂点を歩きつづけたグループ、レッド・ツェッペリンのフロントマンとして活躍した男たちだ。

そのレッド・ツェッペリンが結成されたのは、68年秋のことだった。エリック・クラプトンやジェフ・ベックを輩出したヤードバーズの最後のギタリストとして働いたジミー・ペイジはその年の夏にバンドが分裂した時、バンド名使用の権利を譲り受け一方で残されたコンサート契約を消化する義務を負うことになった。そこで彼はドノヴァンのレコーディングなどで知り合っていた名セッション・プレイヤー、ジョン・ポール・ジョーンズを誘い、当時はまだ無名の存在だったロバート・プラントとジョン・ボーナム(ともにバーミンガムのローカル・グループ・バンド・オブ・ジョニに在籍していた)の二人を加えて、当初はニュー・ヤードバーズの名でこの新グループをスタートさせたのだ。

その年、68年の暮れにわずか30時間で録音されたものだというデビュー・アルバム『レッド・ツェッペリン』で幕を開ける彼らの栄光の歴史についてはあらためてここで説明するまでもないだろう。シングルを切らないというグループの方針の結果としてポップ・ヒットこそ飛ばさなかったものの、ツェッペリンのアルバムはすべてが驚異的なセールスを記録し、さらに彼らはあのビートルズが60年代に打ち立てた興行記録をつぎつぎと各地で塗りかえていった。また、その活動をつうじてメンバーはつねに実験的姿勢を強く持ちつづけ、ツェッペリンはほかのハード・ロック/ヘヴィ・メタル系グループとは明らかに一線を画すまったく独自の世界を築き上げていったのだ。

しかし、そのレッド・ツェッペリンの輝かしい活動の歴史にもやがて終止符が打たれる日が訪れた。1979年秋発表の『イン・スルー・ジ・アウト・ドア』を受けて行なわれた翌80年夏の欧州ツアーの直後、9月25日にジョン・ボーナムが突然、他界してしまったからだ。過度の飲酒が原因だったといわれているが、きわめて个性的なドラマーであった友人の死は残された3人に大きな衝撃を与えた。話し合いの末、彼らは「ボーナム亡きあと、グループを継続させるのは精神的にも物理的にも不可能」という結論に達し、12月4日にレッド・ツェッペリンの解散が正式に発表されたのだ。

その後、ジミー・ペイジとロバート・プラントが当時分裂中だったイエスのメンバーとXYZ(元イエスと元ツェッペリンの合体という意味)なるグループを結成するという計画が持ち上がったものの、この話は途中で暗礁に乗り上げてしまい、それぞれがソロ活動をスタートさせた82年以降、二人は別々の道を歩みつづけてきた。ファン・プロジェクトという趣の強かったハニー・ドリッパーズ(84年)、ライヴ・エド(85年)やアトランティック・レコード創立40周年記念コンサート(88年)へのレッド・ツェッペリン名義での出演など、二人が顔をあわせることは何度かあったが、バンドとしての活動再開や本格的な新グループ結成などについては話し合ったことすらなかったという。

そんな状況が93年秋に大きな変化をみせはじめる。デイヴィッド・カヴァーデイルとのツアーを開始するための準備を進めていたジミー・ペイジにロバート・プラントのほうから、二人の名を冠したプロジェクト開始の可能性を打診してきたというのだ。翌94年の春、モロッコに出向いてひさびさに新曲を書くことで感触を確かめあった二人はその年の夏にMTVのライヴ・プログラムの収録を行なう。そして、そこで録音された音源とモロッコ録音の新曲などによって構成されたアルバム『ノー・クォーター』を11月に発表。年が明けると、アメリカン・ミュージック・アワードやロックンロール・ホール・オブ・フェイムの授賞式でライヴを披露し、5月にはついに大規模なワールド・ツアーを開始してしまっただ。

MTVでのライヴと同様、エジプト人ミュージシャンのアンサンブルやストリングスをバックにフィーチャーする形でつづけられたこのツアーは約80回のステージをこなしたあと、10月末のニューヨーク公演を最後にいったん休みに入った。二人はその長いツアーをつうじてさまざまな自信を得たようだ。そして、今回の来日を前に、彼ら半年が明けるとすぐに、レッド・ツェッペリン時代には一度も訪れたことがなかったという南米諸国を回ってきた。二人のリユニオンがこれだけ大きな成果を生むことを誰が予想しただろう。ペイジ&プラントは、もはやプロジェクトという段階を終え、バンドと呼ぶべき段階に入ってきているのかもしれない。

これまで再結成の噂や可能性を否定しつづけてきたあなたたちがなぜこの時期にこいつプロジェクトをスタートさせたのですか？ すべてのカードが出揃ったからだよ。

昨年、1995年の10月25日のことだ。僕は国連創立50周年の記念行事などでこつた返すニューヨークでジミー・ペイジとロバート・プラントの二人にインタビューする機会を与えられた。春先からつづけられてきた欧米ツアーのとりあえずの最終地点ということになるマジソン・スクウェア・ガーデンでの公演を前に、日本の音楽ファンに向けてということで、意外にも快く彼らはインタビューに応じてくれたのだ。快くとはいえ、二人はロック界の文字どおりの巨人である。なに気なくソファに腰掛けていても、その存在感はまさに圧倒的なものだった。マスコミとの関係に関してもさまざまなエピソードを残してきた彼らを前にした時の気持ち、お察しいただければと思う。

それはさておき、そのインタビューでの最初のやりとりが冒頭に紹介したものだ。答えたのはロバート・プラント。彼はサングラス越しに驚のように鋭い目でこちらをにらみながらしばらく考えたあと、なんともイギリス的な表現でそう答えてくれた。そして、さらにこんな言葉をつづけたのだ——「ただし、過去の繰り返しに過ぎないような、単なるリユニオンにはしたくなかった。というより、ジョン・ボーナムがいなかったから、それは過去の繰り返しにすらならないんだよ」。

プラントが過去の繰り返しという言葉で表現しているのは、昔の自分たちをコピーするようにツェッペリン・ナンバーを演奏するということなのだろう。彼とペインのプロジェクトにせよ、ジョン・ボール・ジョーンズを含めての活動再開にせよ、そんなことをしては意味がない。レッド・ツェッペリンをキーワードとしてこの時代にかつての仲間と本格的な活動を展開するためにはそこに深い意義を持たせる必要があった。

「西洋とか東洋といった枠を超えた不思議な雰囲気を出してみたいと思った。もともとレッド・ツェッペリンの音楽にはそういう雰囲気があったしね。ジミーの音楽性やギターは東欧から中近東にかけての香りを持っていたし、僕の歌詞もイギリスでは体験できないようなシチュエーションをもとに書かれていたんだ。異文化との出会いや異文化圏での体験こそが僕たちの気持ちを刺激するんだよ」。

異文化圏の音楽と、イギリス人としてブルースやロックを聴いてきた彼らの本来的な音楽性との融合は、あの時代、レッド・ツェッペリンがもつとも真剣に取り組んでいたテーマだ。だが残念なことに、キング・オブ・ヘヴィ・メタルというイメージがあまりにも強かったために、そういうポイントは見過ごされがちだった。プロジェクト開始にあたってまず二人は、すべて新曲で勝負するのではなくツェッペリン・ナンバーを再訪することを決め、彼らが70年代に創造した音楽の本質的な魅力にあらためてスポットを当てることをそのメイン・コンセプトと定めたようだ。そしてその結果として、アルバム『ノー・クォーター』やツアーでの選曲はすんなり決まっていたという。

「選曲には悩まなかった。たとえば“GALLOWS POLE”のようにケルトの影響を受けている曲や、“KASHMIR”のようにオリエンタルな香りの強い曲は、向こうからやってくれていったようなものだった」と語るのは、ジミー・ペイジ。さらに彼はこんなことを強調する——「曲は生き物なんだ。それを成長させるのは僕たちで、ツェッペリンの時代も今もその考えはまったく変わっていない」。また、ロバート・プラントはその選曲に影響を及ぼしたと思われる考えを別の視点からこう語っていた——「クラシック・ロックのラジオ局でツェッペリンがかかるとしてもせいぜい5曲程度。無理もないことかもしれないけれど、マイナーなイメージの曲は素晴らしい作品でもそのまま終わってしまうんだ」。

ペイジ&プラントのプロジェクトがスタートした時、多くの人が、彼らは遠からず分裂するだろうと心の底で思ったに違いない。しかし、彼らは昨年の春から秋にかけて欧米各地で80回以上もステージに立ち、その言葉どおり、過去の作品を成長させ、またそこに新たな生命を与えてきたのだ。

最後に、今回のツアーの意義を自ら語ってくれたロバート・プラントの象徴的な言葉を紹介することにしたい。「長くツアーをつづけてきていると自信も出てきた。MTVに出演した時と比べたら声だって2倍ぐらいいく出ている。ジミーのギターも素晴らしい。僕たちは音楽と音楽の融合を追求して、その結果としてまったく新しい解釈の音楽を生むことになったんだ。それは、過去にあるバンドが得たステイタスを再現するといった次元を超えたところに来ているものだと思うよ」。

AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1996

jimmy page robert plant
WORLD TOUR 1995/6

東京公演

TOKYO FM開局25周年記念

2月5日(月) 武道館大ホール

2月6日(火) 武道館大ホール

2月8日(木) 武道館大ホール

2月9日(金) 武道館大ホール

2月12日(月) 武道館大ホール

2月13日(火) 武道館大ホール

■主催:日本テレビ/TOKYO FM

大阪公演

2月15日(木) 大阪城ホール

■主催:毎日放送/FM802

■後援:スポーツニッポン新聞社

名古屋公演

2月17日(土) センチュリーホール

■主催:中部日本放送

大阪公演

2月19日(月) 大阪城ホール

■主催:毎日放送/FM802

■後援:スポーツニッポン新聞社

福岡公演

2月20日(火) マリンメッセ福岡

■主催:FM FUKUOKA

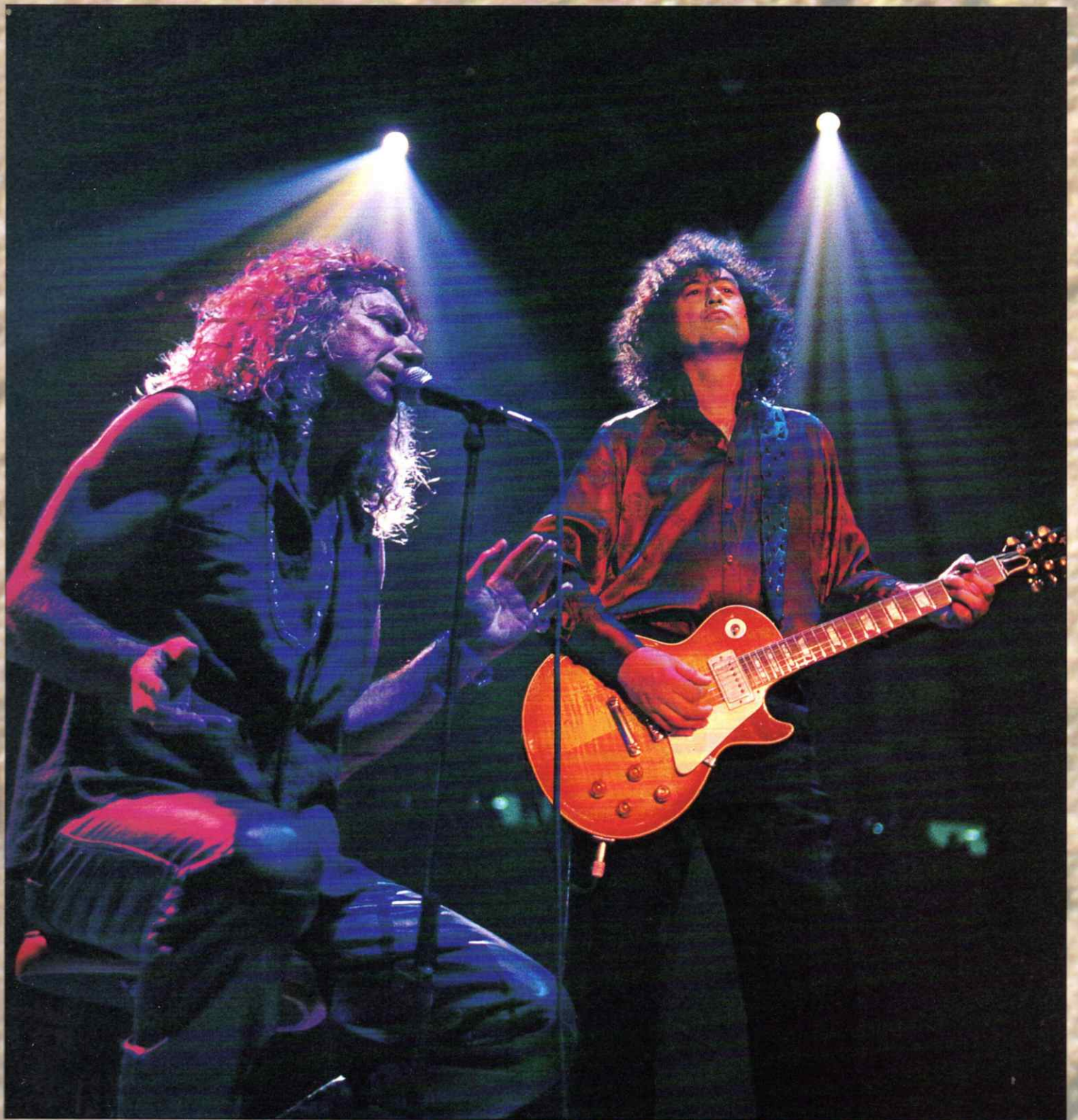
■後 援:小学館

■協 力:マーキュリー・ミュージックエンタテインメント(株)
株イーストウエスト・ジャパン

■招 聘:ウドー音楽事務所

■企画運営:ウドークリエイティブアーティスト

jimmy page robert plant



WORLD TOUR 1995/6



WORLD TOUR 1995/6

私が初めてジミー・ペイジとロバート・プラントのステージを見たのは、1969年、ニューヨークシティーのフィルモア・イーストでのこと。それは劇的で、忘れがたい一時だった。もちろんペイジはすでに有名になって軌道に乗っており、当時業界をリードする60年代の大胆で可能性を秘めたイギリスのバンド、キートン・パースのリード・ギタリストであった、エリック・クラプトンとジェフ・ベックの後を追う勢いであった。このレッド・ツェッペリンという奇妙な名前の新鋭バンドが、偉大な功績を残すことになろうとは。

彼らのストーリーの発端は誰もが知るところだが、フィルモアでのステージは私にとって最も記念すべきコンサートであった。そして言うまでもなくレッド・ツェッペリンはロックンロール史に多大な影響を及ぼすことになった。その功績から彼らはロックンロールの名誉殿堂入りを果たしている。

ジミー・ペイジとロバート・プラントが最初に将来の新しいビジョンをたてたのは、その26年前のツアーであった。そして後に彼らが再び活動を共にすることを決め、“No Quarter: Jimmy Page and Robert Plant Unledded”をリリースした時、二度目の大成功を修めることとなったのだ。

アーティストは観客を無視するべきではないが、活気を保つためには、完全に独立した存在であるべきであることも事実だ。ペイジとプラントが再びコンビを組んだ時もファンに迎合するか否かというリスクがあったのだが、二人の間には互いに了解していることがあった。それは、レコード会社やファンが望んでも過去の繰り返しはしないということ。二人は新しい音楽を、ペイジの言葉を借りると、「舞い上がらせる」決意をし、さもないければ以前そうしたように、別々の道を歩もうと決めた。その時点から二人の男のどちらにも情容赦はなくなったのだ。

しかしペイジとプラントは完全に過去を切り捨てて将来へ向かったのではない。もちろんそれは下手な小細工をして無責任に昔の音楽をリサイクルしようというのではない。オープン・マインドでどの曲が現時点の彼らの感情にマッチし、どれがそうでないのかを見極めようとしたのだ。これまでの道のりを検証してフルに充電してから新天地へと向かおうと言うのだ。

これらの作業の結果であるパフォーマンスはMTVのビデオとなり、熱意に満ち溢れるアルバムと今回のツアーによって真にユニークで音楽的な多面性をあらわにした音楽の世界に対する欲求は押さえがたいものとなったのである。

彼らの熱意は実を結んだ。ペイジとプラントが集めた核となるバンドは、二人が長年実績を挙げて来たブルースを基盤にしたロックンロールを再び発火させるに十分な卓越したメンバーによって構成されている。私は個人的にこのバンドの暴発的な力を証明することができる。ロンドンでのリハーサルを訪れた時のこと、彼らのパワーで、壁にたたきつけられそうになったことがあるのだ。

しかし、力強さというものは、そのバンドが同程度のデリケートさを持って初めてインパクトを与える。ペイジは常に彼の音楽の中で明と暗の対称を意識している。アコースティックギター、マンドリン、バンジョー、キーボードそして催眠的で単調な低音を出すイギリスの四弦琴などを駆使したこのバンドは、極めて繊細で意味深な音を作りだし、深みのあるケルトのそしてアフリカ系アメリカの民俗音楽のルーツを感じさせている。

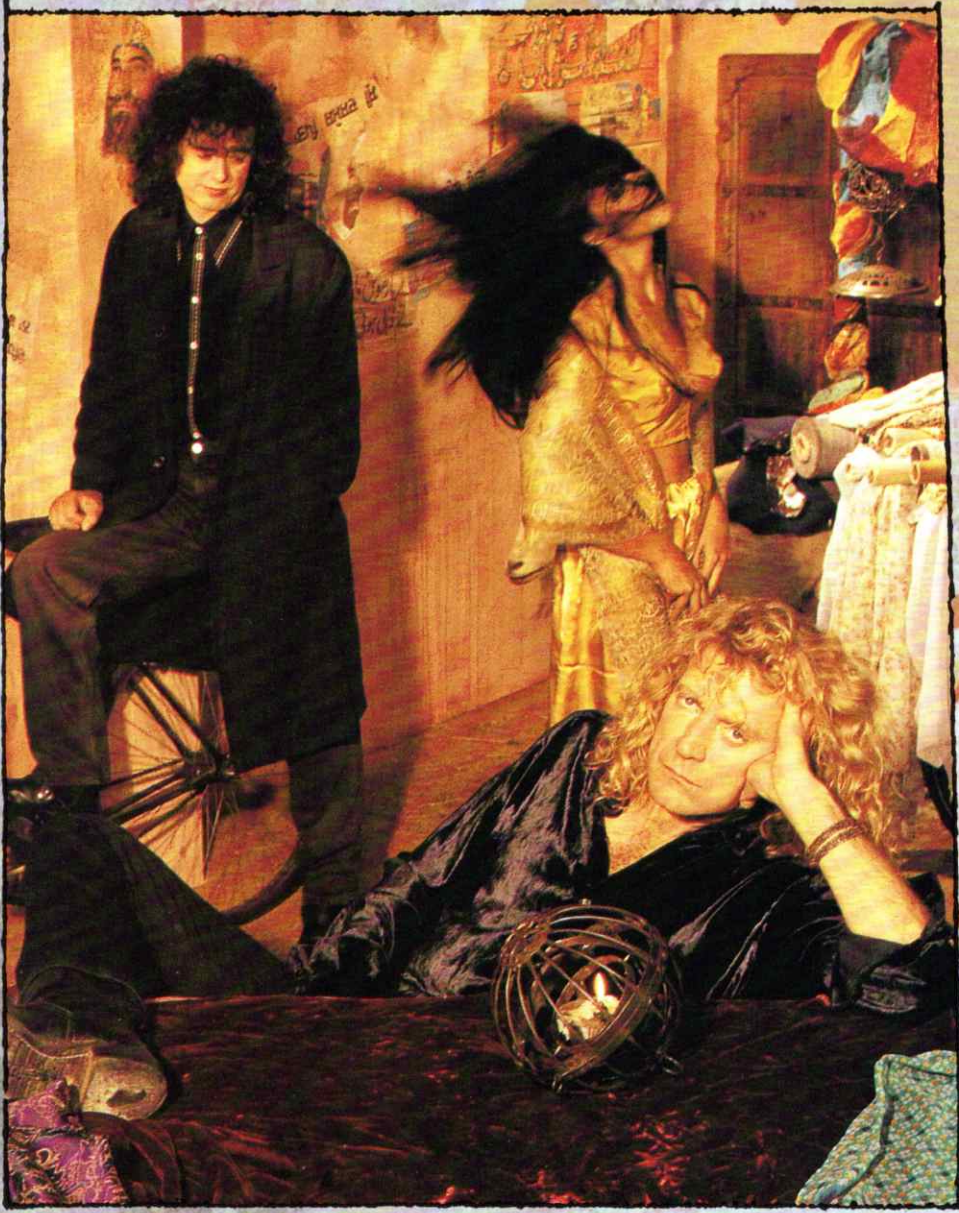
更に特筆すべきは、ペイジとプラントが、後期ツェッペリン時代に使っていた幻想的な中近東と北アフリカのサウンドを更に追求していることだ。今回のツアーには、エジプト人のアンサンブルと西洋のオーケストラが同行している。ペイジとプラントの音楽は大地をうならせるようなブルースから霊妙なアラビア音楽、オーケストラのリッチさから素朴なフォーク、激しいロックンロールからみずみずしくロマンティックなリズム&ブルースまで、多種多様なムードの音楽の目を見張るような集合体となり、新たな可能性を生み出した。

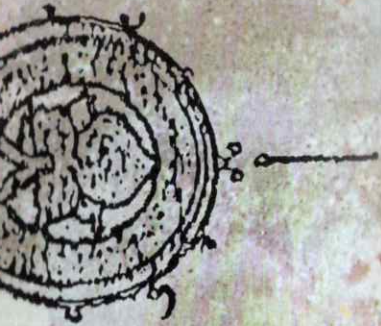
沢山の協力者とその計り知れない程の貢献によって成り立っている音楽の渦の中心にいるのは二人の男、ジミー・ペイジとロバート・プラントである。リード・ギタリストとリード・シンガーというロックンロールの典型的な組み合わせである彼らのパートナーシップは最初から必要不可欠で、緊張感がありクリエイティブであったが、同時に常にダイナミックでよどみなかった。フィルモアでのコンサートでは、彼らは二人の神秘的なつながりを強めるためか、二人の間の区別を全て取り去ろうとしているかのように見えた。ペイジは、歌うプラントに体を傾け、プラントは全てが一つのワイルドなサウンドの渦へと高まるまで、ペイジのギターのリフを口ずさむという具合に。

ペイジとプラントは、その大嵐を再び起こそうとしている。彼らの音楽は最も静かな時でさえディオニソス祭のようだ。別世界の魔法にかけられたかのようなイメージ。想像力の官能性。エキサイティングなエクスタシーである。彼らの音楽は一つの旅路とそこから生まれる冒険。周知の事柄の新しい側面を見せられたような、又は物事に対する理解を思いがけなく更に深めた時のような衝撃である。

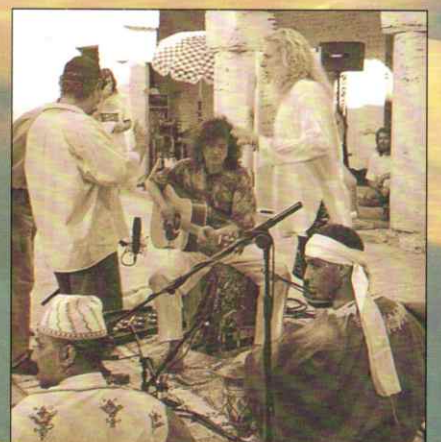
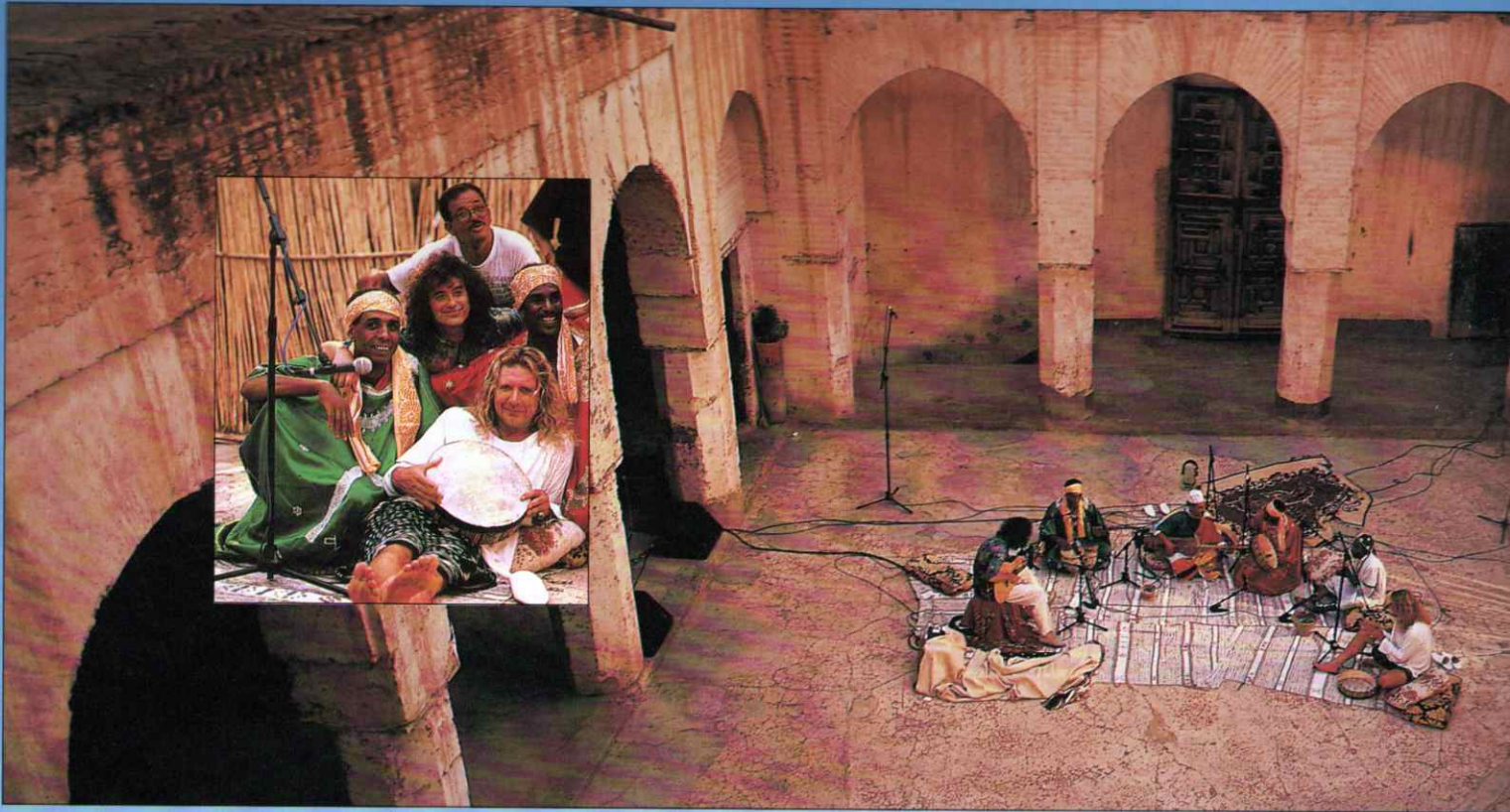
この音楽が求めるものは、ペイジとプラントがツアーに出発する前にお互いに了解し合ったこと。過去はともかく、前進あるのみ。新しくするか辞めるかの二者択一。もう一度飛んだ、ということである。彼らは自らが与えただけの反応を期待しているのだ。ライブのパフォーマンスでは、観客が求めない限り魔術は起こらない。どのステージでも魔術の可能性大である。それはジミー・ペイジとロバート・プラントが、行く先々でかける魔術。あなたが彼らの世界に入り込んで身をまかせるとしたら、その魔術はあなたのものとなるのだ。



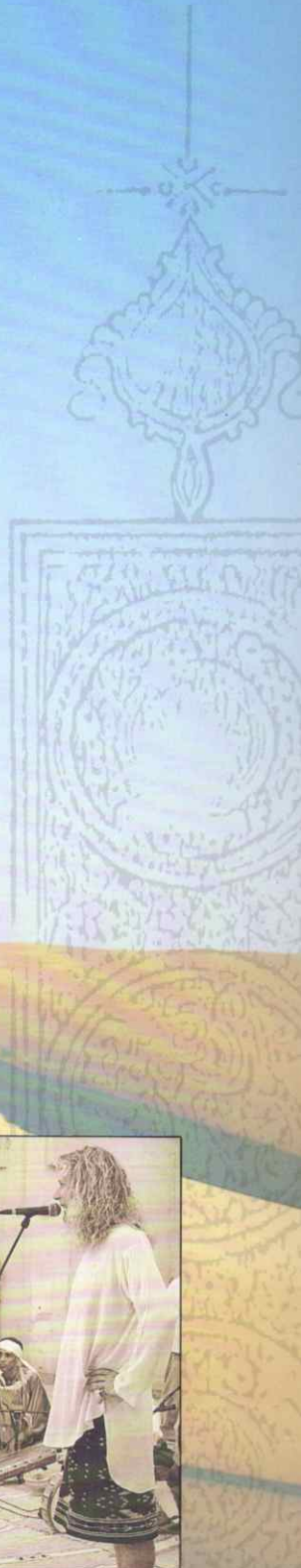
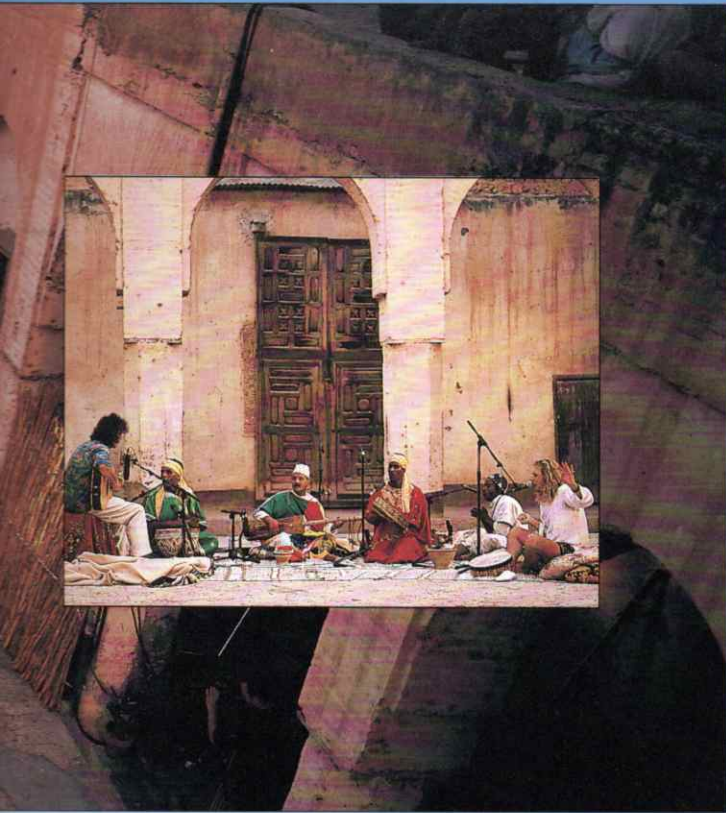






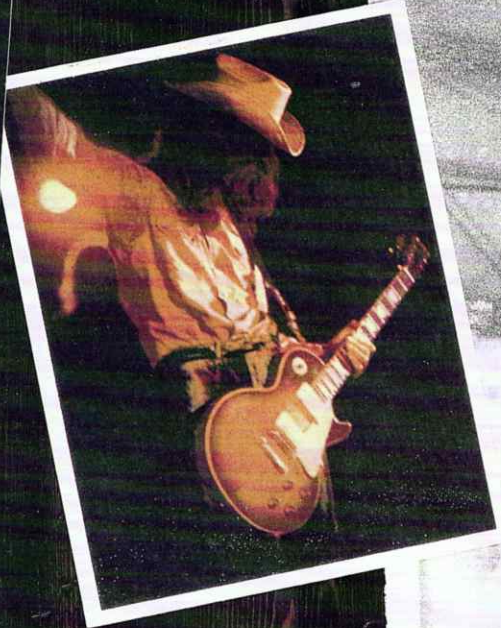


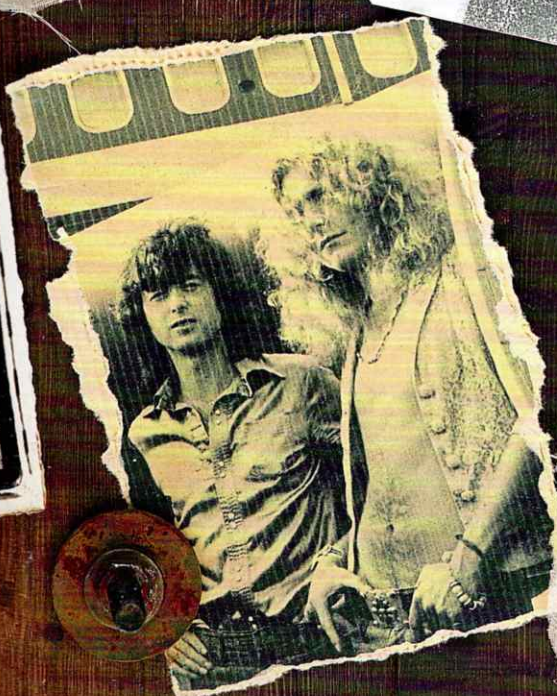
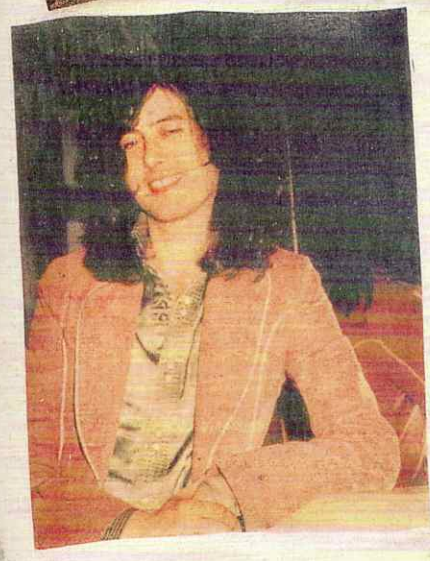
"Life is a bridge. Cross over it but build no house on it." ~ Gautama Buddha



















CHARLIE JONES

チャーリー・ジョーンズは1963年ブリストルに生まれた。最初にベースを手にしたのは14歳の時。モータウンのジェームス・ジェイムソン、ジミー・ヘンドリックス、ジャニス・ジョプリン、リー・スクラッチ・ペリーそしてブラック・アーキ・スタジオのサウンドに影響を受けた。

10代は地元のバンドに在籍。中でも有名なバンド“Violent Blue”にいた時にはアルバムをリリースし、そこで作曲を初体験した。この頃彼は、スタジオでテープ・オペレーターをするかたわら、地元のスーパーマーケットでトロリーを操作する仕事をするなど、人生経験を積んだ。

地元のバンドを転々とした後、ロバート・プラントの1987年“Now And Zen”ツアーのオーディションに合格。それが、ロバート・プラントや“Manic Nirvana”、“Fate of Nations”などのプロジェクトとの長い付き合いの始まりで、作曲、ツアーに参加している。

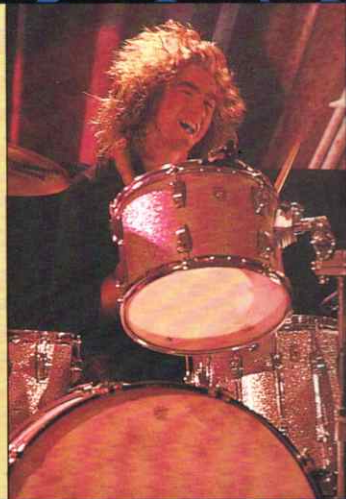
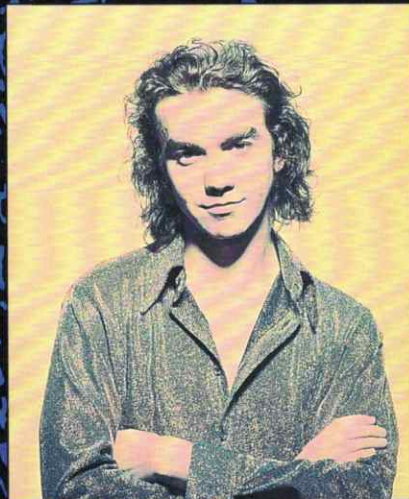


MICHAEL LEE

マイケル・リーは1969年11月19日、ダーリントンに生まれた。彼の母がプレゼントしてくれた中古のドラム・キットがきっかけとなった。影響を受けたのは、ジョン・ボン・ナム、ジョン・デンスモア(ザ・ドアーズ)、ジンジャー・ベイカー、キース・ムーンなど。

初めてプロとして演奏したのは、“Holasade”というバンドに在籍していた18歳の時。その後ロサンゼルスへと旅立った。サンフランシスコに居る時にリトル・エンジェルスとのオーディションの誘いの電話を受けた彼はすぐに飛行機に飛び乗り、時差ボケの体で朝の7時にロンドンに降り立った。オーディションの番号は144番。しかし演奏して2分後には合格。ポリグラムのリトル・エンジェルスと契約し、初めてレコードも出すことができた。1992年まではThe Cultのツアーにも参加していた。

1993年5月、マイケルはロバート・プラントのバンドのオーディションの誘いを受け、現在の地位を得た。ロバートとは、ヨーロッパ、北・南米のツアーを共にしている。ページとプラントのコンビとは、“No Quarter”のプロジェクトから一緒である。



ED SHEARMUR

クラシックの基礎を持つエド・シーアマーは、10代の時から様々な音楽関係の仕事について来た。アニー・レノックス、ブライアン・アダムス、エリック・クラプトンと共に、キーボード奏者として活動した経験を持つ。

作曲家マイケル・カメンと共同でエドが手がけた映画のプロジェクトには、ダイ・ハード、バロン、リーサル・ウェポンシリーズなどがある。彼の著作権によって作曲した映画音楽には、“The Cement Garden”、“Heart of Darkness”、“Demon Knights”などがある。編曲者としての代表作にはピンク・フロイドの“The Division Bell”そしてページとプラントの“No Quarter”がある。



NIGEL EATON

ナイジェルが四弦琴の演奏を始めたのは1981年。1985年には英国のフォークグループ“Blowzabella”に入り、6枚のアルバムをリリースしている。又、“Ancient Beatbox”というグループから1枚のアルバムを、そして、セディスクからソロのCDを出している。

彼は、ロンドンの音楽専門学校で四弦琴を学んだ最初の人。そしてフランスのセント・シャルティエ・フェスティバルの古楽器コンテストのソロ部門で優勝したこともある。

その他、“ザ・フィルハーモニア”、マーク・アルモンド、スコット・ウォーカー、ゲリー・ケンブのプロジェクトにも参加している。

彼は、歌手ジュリー・マーフィーと共に、“Whirling Pope Joan”のメンバーで、初のCDをリリースしたばかりだ。

ナイジェルはイギリスの四弦琴の第一人者である。

THE EGYPTIAN PHAROHS

エジプシャン・ファラオズは、1987年以来、様々な形で活動している。ファラオズが関係するプロジェクトの一つ一つの要求を満たすため、これまで様々な変化や成長を経験して来ている。今までに13枚のアルバムのレコーディングに参加しており、ヨーロッパやエジプト国内の数々のツアーに同行した。

ザ・ファラオズのメンバーのレベルは非常に高く、秀れたソリストをかかえているため、西洋のアーティストとの共演もたやすい。これまでに共演したのは、デボラ・ハリー、マーク・アルモンド、ヴァヤ・コン・ディオスなどである。

ザ・ファラオズは純粋なエジプト音楽と他の文化的影響とを融合させた実験的なサウンドを追求するといきびしいポリシーを常に貫き通して来た。音楽の本質を見失うことなく他の文化の要素をうまく取り入れた音楽の坩堝と言えるだろう。



MOHAMED ABBAS
(Bendir, Duff, Req, Mazhar)



WAEIL ABU BAKER
(Solo violin)



HASSAN CHALF
(Bendir, Duff, Mazhar, Oud)



ADEL ESKANDER
(Violin)



IBRAHIM ABDEL KHALEK
(Bendir, Duff, Finger Cymbals)



HOSSAM RAMZY
(Egyptian Tabla)





*"Men vent great passions by breaking into song, as we observe
in the most grief-stricken and the most joyful." ~ Vico*

WORLD TOUR 1995/6

Jim
McP

Robert Plume